

情熱の国 インド

〜考えすぎしずに行ってみよう〜

外国語学部
国際文化交流学科3年

石坂 茉莉衣

「インドへ行く」

そう思ったことは今考えてみると好奇心に身を任せた、ただの勢いだったのかもしれない。2011年4月、私は将来へのビジョンがまったく描けずに3年次を迎えたことに焦っていた。自分が将来何になりたいのか、どんな生き方をしていきたいのか、考えれば考えるほど先は暗くなっていくばかりだった。

そのように落ち込んでいた時に、たまたま海外インターシップの説明会に参加した。友人が昨年参加していたのを聞いて、どのような様子だったのか興味があったからだ。

インドに惹かれたのは、インターシップの内容が面白そうだったからという理由だった。私は課外の活動で幅広い年代と英語活動を行っている。体で物語を表現したり、英語の歌を歌ったり、絵

本を読んだり、キャンプに参加したりと、色々なことを経験させてもらった。自分が今までやってきたことを実践する良い機会にならないかと思っていたときに、インドのインターシップで体験できそうなのが、やってきたことを生かす場になるかもしれないと考えた。

しかし、海外インターシップに参加するのならば1週間後までに申し込みをしなければならなかった。当初、「とりあえず覗いてみよう」くらいの気持ちで来ていた私は、この決断する期間の短さに悩んだ。しかし、今「何か」をしなければという気持ちを大切にし、インドのインターシップに参加することに決めた。

少しずつインドのことを調べてはいたが、言語学習までは手が回らなかった。直前のオリエンテーションで、「いろいろなことを調べてから行くのも

良いですが、先入観に囚われずに行ってみることもいいと思いますよ」という現地のエージェンツさんの話を伺い、思い切ってその方法に従ってみることにした。

8月6日夜、インドのムンバイへ到着する。海辺のためか、湿度が高くじめじめしていた。そこから車で約3時間かけてプネ市に向かった。初めて見るインドの町並みは、砂埃がひどく、「マスクがあったほうがいい」というアドバイスは本当だった。

私が今回訪れた西インドのプネ市は、マハラシュトラ州に所属している。ムンバイが州都で、州の公用語はマラティー語だ。ヒンディー語は学校で習い、プネ市で日常的に話されているのはマラティー語である。また、英語も公用語として扱われているため、私はこの一ヶ月間を主にヒンディー語、マラティー語、英語、日本語という

濃厚な多言語環境で過ごした。普段日本語しか使わないのに、私の脳はよく処理してくれたものだと思う。

また、インドは多文化共生国家である。EUのように細かく言語が分かれており、文化も地域によって異なる。宗教に関しては、ヒンドゥー教が国民の大多数を占めるが、その他にもイスラム教、シク教、ジャイナ教などの宗教が信仰されている。「無宗教」ということはほとんどありえないというので、日本人である私が行っても大丈夫なのか：という不安は少しあったが、宗教を理由に大きな問題になることはこの一カ月の滞在ではなかった。

8月7日午前2時頃、お世話になるホームステイ先に着いた。「こんなに遅くにお邪魔して大丈夫なのだろうか。」と思ったが、遅い時間にも関わらず笑顔で出迎えてくれた。その日は飛行機と車に揺られて疲れていたのですのですぐに寝て、次の日に改めて挨拶をした。

プネ大学の日本語学科で勉強している Madhura (マドゥラ) Karkare さんの家は、Madhura さんのお父さん、お母さん、そしてお兄さん夫婦とその子どもの7人家族だった。私の家は核家族で今は一人暮らしをしているので、みなさんの思いやりがとても温かく、嬉しかった。そしてお母さんも

お兄さんのお嫁さんも Madhura さんも料理が上手で、毎日美味しい料理を振舞ってくれた。そしてお兄さん夫婦の1歳になる娘、Swara (スワラ) と遊ぶことは日課となっていた。(写真1)

家族とは主に英語、Madhura さんとは日本語や英語を混ぜながら会話し、そしてマラティー語を教わった。マラティー語は母音の数が日本語と比べると非常に多いため、発音が難しいと感じた。聞こえたとおりに発音しても、ゆっくり発音してもらおうと全く違う音に聞こえることが多々あった。

8月8日から最初の一週間は、英語とヒンディー語の授業を受けた。ビジネス英語の授業だったので、学んだことはその後役に立ったし、午後から



写真1：兄夫婦の子、Swara との一枚

のヒンディー語は難しかったが、その後の生活のためになった。この一週間は日本で過ごすこととは異なる「非日常」に慣れるために必要な時間だったと思う。毎日ティーブレイクがあり、「のんびりしすぎていて、いざインターシップが始まったら絶対に慣れるのに大変だ」と思うほどゆったりとした時間が流れていた。このティーブレイクの時に飲んでいたお茶をヒンディー語ではチャイ、マラティー語ではチャハという。牛乳と砂糖とショウガの入ったお茶は、気持ちを落ち着かせる作用があるように至福のひと時だった。ホームステイ先でも毎日淹れてくれる、一日を始めるうえで欠かせないものになっていった。(写真2)

英語とヒンディー語研修の最後の日に、インターシップのオリエンテーションがあった。プネ大学と、Door Step school という NGO の団体の事務所を訪問した。プネ市は日本語学習者が多く、プネ大学には日本語学科があり、多くの生徒が日本語を学んでいる。学生に「何故日本語を勉強しているのか」と聞いたら、「ビジネスに役立たい」という理由が多かった。



写真2：毎日飲んでいたチャハ

Door Step school は、バスの中で授業を行うという活動をした最初の団体で、多くの恵まれない子どもたちに教育面でのサポートをしている。インドでの識字率の問題に起因する社会格差の解消に取り組んでいる。ムンバイで設立され、インド国内にその活動を広げつつある。

このオリエンテーションは、のんびり過ごしていた私の目を覚ましてくれるものだった。インドに来てから1週間が過ぎ、生活に慣れてかけていた時だったのだが、この時の私は肝心の「インターシップ」という目的が少し薄れてしまっていたと思う。責任者の方に、「あなたはここで何をしたいですか」と聞かれたときに、「私はいったい何をしにここに来たのか」ということを考え直さなくてはと思った。確かに準備はしてきていたのだが、心の中で「自分で進んでやる」ということよりも「誰かのサポートをする」という意識が強くなったと思う。そうではなくて、「自分のやりたいこと」を發揮する場ではないか！と改めて意識しなければならなかった。海外でインターシップをすると決めた時に、「積極的に動く」ということは欠かせないことだと、頭で思っていたのに、1週間ですれを忘れかけるなんて…と深く反省した。受け入れ先の方もそれを感じ取ったのか、Door Step school の責任者の方からはパンフレットを頂

いた。火曜日（15日月曜日は祝日だった）からのスタートの緊張が増したことは言うまでもない。

8月16日から本格的にインターシップがスタートした。私が体験した内容は、プネ大学での日本語教育の補助と、NGOの団体での子どもたちとの活動だった。大学では午前中に、日本の四季折々のイベントのNews Letterとことわざを書いた。大学でのインターシップのお世話をしてくれたPrianka（プリアンカ）さんと共に図書館で机に向かう作業が多かったため、接することのできる学生も限られていた。実際の日本語教育の現場でのサポートは体験できなかったが、日本文化を発信するとても良い機会だったと思う。もっと積極的にならなければ、と思う反面、誰に業務のことを相談していいのかを判断できなかったため、現状に留まってしまう。そのことはこれからの生活の中でも気をつけなければならないことだと感じた。

NGOのDoor Step schoolでは、小学生年代の子どもと活動をした。Shivaji Housing Societyでは学童保育に似た活動をしていて、スタッフの方は幼稚園年代の子にマラティー語を教えたり、遊びを教えたり、小学生の宿題を見たりしていた。ここの言葉はマラティー語で、体当たりコミュニケーションをしなければ言っていることが伝わら

なかった。スタッフは英語ができる人がいたので、説明が必要な時は頼らざるを得なかった。初日に、日本のことを紹介するアルバムを持ってきていたが、ペース配分を間違え、一日で全て説明してしまったり、レクリエーションゲームをやったりした。一番人気だったのは折り紙（写真3）で、これは口で説明しなくても見てわかるためであろう。高学年の子に見せれば下の年代の子に説明してくれた。



写真3：Door Step school で子供たちと折り紙をしたときの写真

絵本は最初に「はらぺこあおむし」を英語でやり、スタッフの人がマラティー語に訳してくれた。それに関連してあおむし、はっぱ、ちょうちよの折り紙を作った。同じく絵本と結び付け、進化ゲームと称してジェスチャーゲームをやってみたが、「他のゲームがいい！」という声が聞こえてきたため、長続きしなかった。時間が経つにつれて、ハシカチ落とし（この遊びはみんなすでに知っていた）やおにごっこなどストリートな遊びが好きらしいということがわかってきたので、そういったものを考えて一緒に遊ぶようにした。

子どもたちは皆パワフルで、体当たりをくらうこともあった。とにかくどんなことに対しても全力なのだ。おにごっこにしろ、カバディ（インドの国技で、攻撃側と守備側に分かれて遊ぶ。私が見たときはプロレスに近いことをしていた。）にしろ、負けたら悔しくて泣くし、勝つことに必死だった。もめごとが多く、喧嘩をよくし、手が出るときもあったが、加減がわかっているように見えた。日本のこどもと比べると、とてもものびのびと毎日を過ごしている印象を受けた。もちろん、学校の外の顔だと思わず、学校ではまた違った顔を見せていると思うが、私が一緒に過ごしていた時はどんなことも楽しそうにやっているように見えた。

Door Step school では3か所の活動場所でお世話になった。2か所目の活動場所は、最初にお世話になった Shivaji Housing Society と比べると女の子が多く、おとなしい印象を受けた。絵本の読み聞かせが好きだったようで、絵本を読むことが多かった。自分が持ってきた絵本は3冊程度だったので、Shivaji のスタッフに絵本を貸してもらった。その絵本が日本語だったので、英語に直す作業も活動が終わった後にしていた。

この子どもたちは絵本も好きだったようだが、折り紙もよくやった。新聞紙を持ってきて一緒に兜を作った時はとても喜んでくれた。（写真4）



写真4：かぶとを一緒に作ったとき

その後も建築現場に従事する人が暮らしている地域にある活動場所に行った。8人ほどの未就学年代の子と接し、絵本を読み、ゲームをした。何度も絵本を読む機会があったため、「はらぺこあおむし」に関しては単語ではあるがマラティー語でわかってもらえるようになっていた。最初は自分のことで手一杯だったが、子ども達がどんな反応をしてくれているかを見られる余裕が出てきたので、嬉しかった。

インターンシップの時間外も多くの事を経験した。インドに滞在している間、時計を見るのが少なくなかった。いつも分単位で時間を気にしている日本での生活と異なり、時の流れがゆったりしていると感じた。人々や雰囲気につられ、私もインディアンタイムになってしまふことが多く、せかせかしていることはあまり多くなかった。日本にいる時には感じることでできない時間の感覚であり、少しだけインドの人に近づけたような気がした。

インドは格差が大きい、ということを知っていたが、それは本当である。スーツを着たビジネスマンがいると思ったら、道で暮らす家族もいる。私はインターンシップで子どもと活動していたので、ストリートチルドレンと呼ばれる子どもとの接し方に戸惑った。ホストファミリーや友人と一緒にいるときは「目を合わせてはいけない」もの

をあげてはいけない」と言われていたが、実際に自分でどうしたいのかを考えても、わからないままだった。「お金のある人は施しをする」という考えがインドにはある、という記事を読んだが、その時だけの助けでもこの子自身のためになるのだろうか；でもこの子が誰からも何ももらえないままだったら：と私の服の袖を引っ張る子を見て考えていた。結局「Nahen（NOの意味）」しか言えない自分はいったい今まで何を考えてきたのだろうか、と自問していた。子どもと接する活動をしているのに、同じ子どもの存在を無視する、というこの矛盾行為をしてしまうこと、考えても答えを導き出せない自分に、もやもやとした感情が残ったままだった。

ホストファミリーのMadhuraさんとは色々な話をした。日本の少子化の話、日本、インド政府の話、恋人事情など、話題は尽きなかった。うまく言葉が出てこないときがあり、上手く伝えられたかは不安だが、話している時はとても楽しかった。(写真5)



写真5：Madhuraさんとのベストショット

街を歩いていて「チーニー」と言われることが多かった。「チーニー」とは中国人という意味で、インドでの東アジア人というと「中国人」というイメージが強いようだ。プネには留学生が多いはずなのだが、街を歩くと注目されることが多かった。特に世界遺産のエローラ(写真6)、アジャンター遺跡に見学に行ったときは東アジア人そのものが珍しいらしく、写真を強要されることが何度もあった。中国とは隣り合っていることと、華僑



写真6：エローラの石窟寺院にて

が多い影響もあるのかもしれない。また、韓国サムスン、LGの台頭が目立っていた。携帯電話はほとんどサムスンのものであったし、自動車もTATA、スズキが多いが、現代自動車も目立っていた。頭のどこかで「東アジアといえば日本」と思い込んでいた私は、現状は全く異なることを肌で感じた。インドと日本は地理的には距離があるが、まだまだ縮められるのではないかと思った。

インドを離れる最後の日に、ホストファミリーと朝食をとった。日本が恋しかったが、この地を離れることも悲しかった。最後は笑顔でお別れをしようと思っていたのに大泣きしてしまっただけで少し恥ずかしかった。「またおいで」と言ってくれた時はとても嬉しかったし、また絶対に戻ってきたいと思った。(写真7)

最後の最後で、飛行機が飛ばないというアクシデントが発生した。結局24時間を空港内で過ごすという経験をしたのだが、「これもご愛嬌」、という風にすっかりインディアンタイムの脳になってしまっており、このアクシデントを楽しむ自分がいたのは、少し驚きであった。

異なる文化と出会うとき、そこには摩擦が生じる。「感情」というもので括ってしまえば、それは個人の自由になるので、全否定はできない。しかし、その「自分たちの今まで経験してきたこととは異



写真7：ホストファミリーと最後に撮った写真

なる文化」を一度受け入れれば、それほど大きな負の感情は生まれないのではないかと感じた。

「先入観に囚われず、行ってみることも大切」という言葉が、これほど心に響くとは思っていませんでした。外国に行くときは、事前の準備が絶対に必要で、相手のことを全く理解していないことは相手を無視していることと一緒に、と考えていたからだ。

それは確かにその通りであり、その国についての基本的な知識は大切だと思う。しかし、「知識に縛られる」ということも事実だと感じた。知識にはステレオタイプも含まれる。〇〇といえば〇〇と言う考えが典型的なもので、私がインドに行く前に思っていた「インドといえばITが強い」がこれに当てはまる。実際に行ってみないと、その国のことはわからない。地図やネットやテレビの断片的な情報は他者を媒介しているため、どこかで他人事だ。（実際にそうではあるが）しかし、「自分」が見聞きし、体験したことは自分だけのものである。そこに主観が加わることで、よりリアリティを帯びたものになる。この「実際に体験する」ということがとても大切であり、先に知識をつけていくことよりも、体験して学んだことのほうが、自分の心にも体にも残ると思う。インドに行ってみることで、もちろん良い面だけではなくて悪い面も見えてきた。しかし、それを否定することなんてできない。親身に接してくれた友人、家族がその地で暮らしているからだ。

知識とはまた違うが、「思い込みに縛られる」とも今回経験した。「アジアといえば日本」という思い込みがそれだ。日本国内にいればそういう考えを持っている人は少なくない。私自身もインドに行くまではそう思っていた。しかし、そのよう

な時代はほぼ終わりかけていると思う。「内向き志向」という言葉に見られるように、近年外に出て行こうとする人が減っていると聞く。しかし、中に籠って見えないものもあるのではないかとと思う。私は今回一ヶ月だけの経験だったが、インドに行くことによって感じたことは少なくない。何よりも、「インドでの家族」ができたことで、インドという国を身近に感じる事ができたし、現在のインドと日本の関係、また、世界に影響を及ぼすインドのビジネス、人々に強い関心を持つことができた。他のものに目を向けることで見えてくるものが必ずある、ということを感じた。

「インドにインターンシップ目的で行く」最初は勢いだったこの行動が、この夏を充実させるきっかけになった。自分の将来を決めるターニングポイントになったのも事実だ。

自分自身の課題は多く残るが、これからの時代を生きていくうえで「先入観に囚われず、やってみる」ということを念頭に、日々の生活を大切に過ごしていきたい。